

## 親を「あんだ」と呼ぶとき

小学生だった娘に指摘されたことがあります。「お父さんはおばあちゃんのことをみんなの時は『おばあちゃん』と呼ぶけど、おばあちゃんだけの時は『あんだ』と言うヨ。」

小学生の娘にどのように聞こえたのかわかりませんが、ともあれそうであるらしい。

さて、この『あんだ』についてはふり返れば苦い苦い思い出があります。あまり思い出したくないのですが、自戒の念も込めて告白します。

親に対して『あんだ』を初めて使ってしまったのは高校3年の時でした。大学受験を控えて親の期待はただうっとうしく、担任の叱咤は余計な世話でしかありませんでした。大人からみればあらゆる可能性を秘めたばら色な18歳ですが、当の本人は夢も可能性も全くつかめないでもがいている高校3年生でした。なにせ、(受験生は誰もがそうですが)1ヶ月先の自分が見えないのですから。しかも、まわりが援助の手を差し伸べればそれを振り払うことで自立や自我を一生懸命誇示していました。

ある時、父親は勉強もしないで自我だけ主張するわがまま息子にあきれてしまって進路の変更を促しました。この忠告がかえってわがまま息子を親不孝にしていまいました。

「あんだに受験の何がわかる…」

たぶん、後の方は何を言ったのか自分でも分からなかったし、父親にも聞こえなかったと思います。ただその時は父親を『あんだ』と呼ぶことによって精一杯反発し、(身勝手な言い方ですが)自立と対等を誇示したように思います。

尋常小学校しか出ていない父親でした。やがて還暦を迎えようとする今に至ってもその父を越えたという実感は私にはありません。何かにつけて教えられ、助けてくれた父を尊敬し、そのようになりたいと本当は思っていたはずなのですが…。

父親は何も言いませんでした。ただ、その時の悲しくてさびしい顔が今でも忘れられません。ちょうど40年前の哀しいお話でした。

その父は孫の顔を見ずに亡くなりました。今生きていたとして

「おじいちゃん」に対しても「あんだ」と言うかどうかはわかりません。しかし、私がもうすぐ58歳で母親が80歳の今なら、おばあちゃんを「あんだ」と呼ぶことは大目に見ていただけなのではないでしょうか。

